様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：３４３１４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２０４８

研究課題名（和文）隋洛陽上林園翻経館沙門釈彦琮の研究

研究課題名（英文）A Study of Shanglin Yuan Fanjing Guan Sramana Yancong of Luoyang in the Sui Period

研究代表者
齊藤　隆信（SAITO, Takanobu）

佛教大学・仏教学部・教授

研究者番号：２０３６７９８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：　隋の彦琮は宗派仏教に埋没することなく、国家仏教の担い手として活動した僧侶であった。しかし、中国仏教史学の中でその存在が忘却されてしまい、現在ではその名を知る者は少ない。そこで本研究は彦琮の生涯を『続高僧伝』から丁寧に調査して、その交友関係、撰述書、漢訳仏典、経典の序文、経典目録、『弁正論』、『通極論』、『浄土詩』などをとりあげて、すべての訳注を作成した。さらに彦琮が生まれた中華人民共和国の河北省隆堯県、および活動拠点でもあった陝西省西安市の大興善寺などに現地調査することによって、日本では得ることのできない種々の情報や論文を入手することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　当時の資料には数多くその名とその業績が認められているにもかかわらず、宗派仏教を研究の中心とする現在の中国仏教史学の中で抹殺されてしまった人物が彦琮である。このように歴史学の中に埋もれた人物を正しく発掘し、その崇高な功績を顕彰できた点に重要な意義がある。これまでのかたよった中国仏教史学研究のありかたに一石を投じたことになる。
　とりわけ彦琮の漢訳法規である『弁正論』の読解は翻訳のあり方の問題に重要な考え方を提供したものであり、また『通極論』では仏教と儒教とのかかわりの中で著された注目できる著作であることも、今後の仏教と中国在来思想との相互研究に資することになるはずである。

研究成果の概要（英文）：　In the Sui Period, Sramana Yancong was not a monk who contributed to the rise of sectarian Buddhism, but a monk who worked for national Buddhism. However, in Chinese Buddhist history, its existence is forgotten, and few people now know its name. In this series of studies, I carefully examined his life using “Biography of a high priest in the Tang period”, and also investigated his friendship, Chinese translations of Buddhist scriptures, forensics of scriptures, catalogs of writings. Through their achievements, translated “The Banzheng-Lun”, “The Tongji-Lun”, “The Pure Land Poems” into Japanese and commented in detail.　I visited Longxiao Hebei Province of the People's Republic of China where he was born and I conducted a field survey at Daxing Zenji Temple of his activity base in Xi'an City. At those places, I was able to obtain many information and papers that can not be obtained in Japan.

研究分野：中国仏教、浄土教思想

キーワード：隋　上林園翻経館　彦琮　国家仏教

１．研究開始当初の背景

中国の隋唐仏教を研究する過程で、『唐高僧伝』や『宋高僧伝』、そして各種往生伝類を通覧する際に、当時盛況しつつあった学派や宗派に所属することのない僧侶が少なからずいたことに気付いた。つまり、唐代の宗派仏教がその系譜を作って自らを権威付けるために、南北朝から隋代のころの高僧を自宗の祖師に擁立しているが、彼らはその際に除外されてしまったということである。

したがって、彼らは後世の研究対象からも除外され、その著作は散逸し、ついには功績すらも忘れられてしまった。しかし、隋代仏教の実態を調査する上で彼らは看過できない存在なのである。そこで本研究は中国仏教史の中に埋没してしまった隋代国家仏教における中心人物であった彦琮について、その人物像と功績を明らかにする必要性を強く感じるようになった。

隋の彦琮に関するこれまでの研究は、わずかに『弁正論』における独自な漢訳論や、『通極論』の訳註が報告されているだけで、その伝記と功績の全体が俯瞰的に究明されたことはなかった。本研究では、彦琮を国家が推進していた仏教の諸事業を中心的に支えた人物として評価すべきであるとの立場で推進しようと考えた。これによって学派仏教研究の陰に甘んじてきた国家仏教的な性格を明らかにすることになり、隋代仏教の実態（学派仏教と国家仏教）により近づくことになると考えていた。

２．研究の目的

隋代仏教については、これまで唐代の学派仏教や宗派仏教の幕開けとしての捉え方に終始してきたといえる。しかしながら、文献資料を丹念にたどると実際には従来の認識では捉えきれない重要な僧侶の存在を見出せる。そこで本研究は、当時は第一線で活躍し皇帝をはじめ政界と太いパイプを持ち、隋代の国家仏教の諸事業に参画し、しかも学派仏教や宗派仏教には属さなかった彦琮（げんそう、557-610）に注目し、その功績を中国仏教史の表側に正しく顕彰することにより、従来の研究では見落とされてきた隋代仏教における国家仏教としての側面を明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

本研究においては以下の 2 つの大きなテーマを設定し、4 年間の研究機関における計画を立てて研究に取り組んだ。

(1) 彦琮の活動と隋代仏教における役割

まずはその生涯を『続高僧伝』、『広弘明集』の資料によって年表を作成し、さらに交友関係やその活動のすべてを隋代仏教の中に位置づける。

彦琮の伝記は『続高僧伝』巻 2（訳経篇）に収められている。北斉時代と北周時代における活動を交友関係（皇帝、官僚、知識人、出家僧）との関わりを通して解明し、また漢訳事業において中心的ではなかったにも関わらず、なぜ訳経篇に編入されているのかを考察する。これらは彦琮の出自が趙郡の名門李一族であったことや、奉勅による事業であったことと無関係ではない。皇帝や高級官僚とのつながりを通して前半生の活動を解明する。

(2) 彦琮の国家仏教観

現存する彦琮の著作の訳註を作成する。とくに『通極論』と『福田論』を比較し、隋代の仏教と儒教の倫理観の相違を明らかにすることで、彦琮の仏教観を究明する。

とりわけ『通極論』は仏教の因果の理法をもって儒教を反駁した対外的に発信した書物であり、『広弘明集』や『法苑珠林』にも引用され、また弘法大師空海の『三教指帰』にも影響を与えているほどである。そこで本書の書誌研究と京都大学人文科学研究所による成果「『通極論』の訳註」の検証を行い、中国仏教における本書の位置づけを検討する。

４．研究成果

（１）彦琮の功績

彦琮の伝記を南北朝から隋代の仏教史の中に位置づけ、その年表を作成し交友関係をすべて洗い出し、その功績を正しく評価した。とくに学派仏教や宗派仏教とは異なる国策仏教の展開に寄与していたことを明らかにした。

さらに彦琮の著作の中で現存する 7 部を検討した。具体的には、すべての訳註を作成し、幅広い知識と中国仏教全体を大局的に捉えていた彦琮の仏教観を、とくに『福田論』と『通極論』を用い、両者が密接に相互補完しながら国家に上奏した綱領であったと注目することで、南北朝仏教の延長でもなく、唐代仏教の淵源でもない、学派や宗派を超越した独自の仏教観を解明することができた。

（２）隋の国家仏教

中国仏教は唐代に大いに盛況することになったが、それは南北朝末期から隋代にかけて発生してくる学派仏教や宗派仏教という大きな特徴の延長にある。ただし隋代仏教の特色は必ずしもそればかりではなく、学派や宗派にとらわれずに単独行動をとった僧侶が存在

していたことも忘れることはできない。その一人が彦琮である。その交友関係の幅広さ、国立寺院を活動拠点としたこと、国家による仏教事業への参画などを通して隋代仏教全体を見渡し、国家仏教あるいは官僚仏教としての側面が強かったことが判明した。
　これは後世に形成され固定化した価値観をもって前時代の仏教を見つめることの危険性を提言することでもある。また当時は第一線で目覚ましい活躍をしていながら、宗派仏教が展開する中で抹殺された隋代仏教の立役者を顕彰できることが証明された。彦琮研究を契機とし、同じように仏教史に埋没している僧侶を順次取り上げることで、隋代仏教を描きなおすことができるということも明らかになった。

５．主な発表論文等
〔雑誌論文〕（計４件）
①齊藤隆信、「二種の彦琮作『合部金光明経序』、、『印度学仏教学研究』、査読有、2017 年、66 巻 1 号、pp.156-162
②齊藤隆信、「漢訳者としての彦琮」、『印度学仏教学研究』、査読有、65 巻 1 号、2016 年、pp.60-67
③齊藤隆信、「無名の彦琮は有名だったー中国仏教研究の死角ー」、『仏教史学研究』、査読有、58 巻 2 号、2016 年、pp.59-70
④齊藤隆信、「釈彦琮の出自と著作」、『印度学仏教学研究』、査読有、64 巻 1 号、2015 年、pp.17-25

〔学会発表〕（計４件）
①齊藤隆信、「二種の彦琮作『合部金光明経序』」、日本印度学仏教学会、2017 年 9 月 3 日
②齊藤隆信、「漢訳者としての彦琮－その訳経と経序－」、日本印度学仏教学会、2016 年 9 月 4 日
③齊藤隆信、「釈彦琮の出自と著作」、日本印度学仏教学会、2015 年 9 月 20 日
④齊藤隆信信、「無名の彦琮は有名だった－中国仏教研究の死角－」、仏教史学会、2015 年 6 月 20 日

〔図書〕（計　０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。